

東京新聞

子どもも「映画人」体験

プロの技術触れ製作

子どもたちがプロの映画監督らと一緒に映画作りに取り組んだオリジナル作品「おじいちゃんの季節」の完成試写会が11日、小平市である。本番が始まる合図のカチンコを鳴らすなど助手を務めたり、役者として出演したり。認知症や戦争体験をテーマに名作を生み出した映画人の技術に、小中学生が触れた成果が披露される。(萩原誠)

「本番!」。先月五日、小平市内の民家を改装した交流施設。撮影スタッフの掛け声とともに子どもたちの表情が引き締まり、それぞれの役割をこなした。

「どっこに立ったらどう映るか、考えながら演技し



撮影に臨む子どもたちとスタッフ=小平市で

て」。スタッフから出演の子どもたちに、厳しい声も飛んだ。共演者は、石浜朗さん(ハ)。故美空ひばりさ

11日、小平で完成試写会

んと映画で共演したこともあるベテラン俳優だ。傍らで指揮する後藤俊夫監督(セセ)は、長野県を舞台に多くの作品を発表している。映画文化を次世代に伝える活動をしているNPO法人、日本映画映像文化振興センターが、二〇〇二年度から都内各地で催している「子どもシネマスクール」の一環。今年も小学五年、中学二年の三十人が参加した。指導し、一緒に撮影・出演したスタッフやキャストは、松竹や日活、大映などに所属し、日本映画界を支えてきた人ばかりだ。作品は、交通事故で両親を亡くした二人兄弟が、一緒に暮らす祖父の認知症と向き合いながら、祖父の戦争体験を聞いて成長していく物語。昨年末、今年初めの冬休み中の八日間、小平市内で撮影が行われた。マイクを支える助手などをした小六荻野楓之介君(ニ)は「重いマイクを持ちやすいように工夫するなどへ。勉強になった」と話した。「助手の仕事や役者の演技が学べ、楽しかった」と話す小六馬頭蘭璃さん(ニ)は、学校で演劇部に入っている。「自分の役や思いを、見ている人に伝えよう」と心掛けるようになり、みんなから演技が変わったと言われた。将来は俳優になりたい。後藤監督は「子どもたちは柔らかい感性を持っている。これを機に将来、映画の仕事に就いてくれれば」。センター副理事長でスクールのプロデューサー竹下資子さん(ニ)は「一つの作品をつくり上げる過程を体験してもらう活動を通じて、映画作りの基本を伝えていきたい」と話す。完成試写会は午後一時半から、ルネこだいら(美園町)。四十七分間の上映後、スクールの修了式がある。入場無料。問い合わせはルネこだいら☎042(345)5111へ。

日本映画映像文化振興センター
〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-45-5
TEL. 03-3200-2118 FAX. 042-344-3399